

2022年度

修士学位請求論文要旨

坂口安吾「桜の森の満開の下」論

——「文学のふるさと」のテーマの戦後——

国際日本学研究科 国際日本学専攻

文化・思想研究領域

4911216002

金井雅弥

本稿は、安吾文学の理解する上で最も重要なテキストとされる「文学のふるさと」（『現代文学』一九四一年七月）で扱われているテーマが戦後になり新たな展開を迎えていたこと明らかにしながら、坂口安吾「桜の森の満開の下」（『肉体』一九四七年六月）の新たな読解を行った研究である。

「桜の森の満開の下」はこれまで安吾の代表作と見なされ、膨大な研究論文が書かれてきた。安吾文学を考える上で欠くことができないキーワードである「孤独」が結末で使われていることから、「桜の森の満開の下」は「孤独」が重要なテーマの一つとなっている「文学のふるさと」と深いかかわりのある作品として論じられてきた。しかし、どのように関連があるのかは論者によってさまざまである。また、こうした論で扱われている「文学のふるさと」はそれが執筆された一九四一年の時点のものを適用するものあり、「桜の森の満開の下」が執筆された一九四七年までの約六年の間に「文学のふるさと」のテーマが展開していったことを考慮したものではない。

「文学のふるさと」で扱われていたテーマがどのように展開をしていったのかを見る際に、着目したいのが小平事件である。小平事件とは、事件の犯人である小平義雄によって行われた連続強姦殺人事件である。小平は一九四五年五月から逮捕された一九四六年八月までに複数の若い女性を強姦、殺害していた。こうした小平事件が始まった時期は、「桜の森の満開の下」が執筆された時期と同時期であった。安吾は報道当初から長期にわたって小平事件に繰り返し言及していく。小平事件について安吾が言及する文章は多数あるが、時期的に整理すると「むごたらしく、救ひのない」存在の問題（一九四六年一〇月～一九四八年二月）、内在的な問題（一九四七年二月～一九五一年四月）、戦争中の倫理の問題（一九四八年三月～一九五二年一〇月）として捉えることができる。一つ目の「むごたらしく、救ひのない」存在の問題は、我々を「突き放す」話である「赤頭巾」の「狼」と並列され、小平が「救ひ」ない現代の話として扱われているというものである。人を「突き放」し「救ひ」のなさをもたらす存在というのは「文学のふるさと」で考えられていた重要なテーマであり、小平はその関心の延長にあったことがうかがえる。二

つ目の内在的な問題は、小平のような「犯罪の要素」は「我々の胸底」にあるとするものである。安吾は「文学のふるさと」で扱った「救ひ」のなさをもたらす存在のことを、小平について考えることを通じて、誰でもそのような存在になり得るといふ内在的な問題として考えていったことがうかがえる。三つ目の戦争の倫理の問題は、小平に人間が本来もっているはずの人間性を見出していったということである。戦争中、空襲を受けて死んでしまった人間を見ても何も感じなくなってしまう「無感動」に陥っていたという人間の「麻痺」の問題は、時に「焼鳥」という言葉で象徴されながら、安吾のテクストでたびたび描かれてきた。小平はこうした「麻痺」していた人々の中で、「良心もタシナミも失わず」に生きていた特異な人物として安吾によって捉えられていた。

これらの問題は「桜の森の満開の下」に見ることができ。 「桜の森の満開の下」の主人公は鈴鹿峠に住み着いた山賊の「男」である。この「男」は「むごたらしく」自身が生きていくためならば平気で人を殺すような人物であった。これは一つ目の「むごたらしく、救ひのない」存在の問題として扱われていた小平を彷彿させる。そんな「男」

は「女」との出会いを境に感覚がおかしくなっていく。なぜ感覚がおかしくなるのかといえば、「男」は「女」の不思議な「美」に魅入られるからである。こうした感覚の異変は「桜の森の満開の下」全体を通して描かれている問題であることが分析によって明らかになった。ただし、

「男」は「美」にいつでも魅入られているわけではなく、「桜」を契機として我に返ることが度々あり、我に返った際に感覚がおかしくなっていたことを「悪夢」として理解する。この感覚がおかしくなり、元に戻るといふ状態を

「男」は行ったり来たりする。こうした「美」に魅入られ、その状態を「悪夢」と感じるといふ体験は、安吾の戦争中の光景に言及する多数の文章と重なる部分があることを指摘できる。安吾は、戦争中の人々が空襲で亡くなった人間の死体を見ても何も感じず「無感動」な状態になっていたことや戦争を「無感動であった悪夢の時間」と語っている。また、戦争中に何も「考へ」ることのない「運命に従順な人間」や戦争そのものに安吾は「美しさ」を見出していた。また、「桜の森の満開の下」の「男」は「悪夢」の状態に次第に「退屈」していく。こうした「退屈」は、「無感動」な状態に陥り「希望」も「目的」もなく「考

へ」することも「忘れ」、「退屈」していた他でもない戦争中の安吾の姿と重なるものである。このような戦争中の安吾を含めた人々の問題は「桜の森の満開の下」の「男」の感覚が「麻痺」し、元に戻るといふ描写に見て取れる。

以上を踏まえれば、一九四一年の「文学のふるさと」から一九四七年の「桜の森の満開の下」が書かれるまでに、「文学のふるさと」のテーマは新たな展開を迎えていたことわかる。それは安吾自身が「文学のふるさと」のテーマでさえ考えることができない「無感動」な状態に陥っていたということ、そうした中で「無感動」に陥ることなく人間としてあるべき姿を保っていた存在を「文学のふるさと」で扱われているような「むごたらしく、救ひのない」存在に見ていたというものである。そして、そうした存在の現代の例として安吾が注目したのが小平義雄であった。

小平は当時の言説では残忍さに加えて性的な面が強調され報道されており、決して肯定的に扱われる存在ではなかった。しかし、安吾にとって見逃すことはできない存在であった。なぜならば、戦争中の倫理の問題を小平に見ただけではなく、人間の本質をそこに見出していたからである。

だからこそ、安吾は長期的に繰り返し小平について言及し、自身に引き付けて考えるべき内在的な問題として小平を扱っていたのである。

「桜の森の満開の下」が執筆された時期は遅くとも一九四六年九月と先行研究では推定されており、同年八月に報道が始まった小平事件と同時期である。さらには安吾が戦争中の自身を回想し、戦争中の「美しさ」や「退屈」を語っている「魔の退屈」（『太平』）も同年一〇月と同時期である。つまり、戦後に「文学のふるさと」の展開として小平に沿って見られる問題は、一九四六年の時点ですでに考えられていたものであるといえる。それは「桜の森の満開の下」という実作に、安吾が繰り返し言及していた戦争の問題が描かれていることから理解できるだろう。そして、そうした問題を安吾は戦後に小平に沿って考えていったのである。